

# 有關日語中「VN+ヲスル」構句的語意限制 —以「非能格・非對格VN」為中心—

李偉煌

靜宜大學日本語文學系副教授

## 摘要

有關日語中「VN+ヲスル」構句的成立條件，以下例文為人所熟知。

(1)a 「花子が部屋を掃除した」

b 「花子が部屋の掃除をした」

「スル」與「VN」之間，插入「ヲ」格助詞時，〔+意図性〕〔+持續性〕是此構句成立的必要條件。此外，請參照如下例，

(2)a 「\*赤ちゃんが誕生をした」

b 「花子は第2の誕生をした」

「誕生する」的主語是「經驗者」，整體為表達動作結果狀態的非能格動名詞(VN)。此種VN未含有「意圖性」及「時間之持續性」，因此「VN+ヲスル」構句較不易成立。但是，若加入「第2の」之類的修飾語後，「VN+ヲスル」構句卻變得相對自然。

本研究以先行研究中被證實的構句語意成分，分析「VN」與「スル」之間插入「ヲ」格助詞的自然度，考察「非能格・非對格VN+ヲスル」構句的語意限制。研究結果顯示，如果不能滿足「主語名詞句的可控制性」、「相態的時間性」、「動詞的語彙概念構造(LCS)」等三項語意限制條件，「VN+ヲスル」構句即很難成立。

關鍵詞：「主語名詞句的可控制性」、「相態的時間性」・「動詞的語彙概念構造(LCS)」

受理日期：2016.03.18

通過日期：2016.05.13

**Semantic Constraints of the Sentence Structure with “Verbal Nouns  
(VNs)+wo suru”**

**---With a Focus on “unergative-unaccusative VNs” in Japanese  
Language---**

Lee Wei-Huang

Associate Professor in Providence University

**Abstract**

The following illustrative sentences of “VNs+wo suru” are well-known as forming conditions in Japanese Language.

(1)a Hanako-ga Heya-wo souji-sita

b Hanako-ga Heya-no-souji-wo sita

Intentionality and Persistence are necessary for the intervention of the case of “wo” which is placed between “suru” and “VNs”. See the following illustrative sentences of VNs with intransitive verbs for more.

(2)a \*Akachan-ga Tanjyou-wo sita

b Hanako-wa Daini-no-Tanjyou-wo sita

“Tanjyou-suru” is one of unergative VNs which is expressing the result-state with subjects of ones have experienced. The structure of “VNs+wo suru” cannot be formed without the intentionality of actions and the persistence of time. However add “Daini” to the structure, the “VNs+wo suru” will be acceptable.

The purpose of this paper is to verify the intervention of “wo” which is placed between “VNs” and “suru” and the semantic constraints of “unergative-unaccusative VNs+wo suru” by using the semantic features which are disclosed in the previous works. As a result, three of forming conditions -- the control of the noun phrases with subjects, the aspectual meaning, lexical conceptual structure -- are necessary for “VNs+wo suru”.

Key-word: Control of the Noun Phrases with Subjects, Aspectual  
Meaning, Lexical Conceptual Structure (LCS)

# 「VN+ヲスル」構文の意味的制約をめぐって — 「非能格・非対格 VN」を中心に—

李偉煌

静宜大学日本語文学系副教授

## 要旨

日本語における「VN+ヲスル」構文の成立条件をめぐっては、次のような例文がよく知られている。

(1) a 「花子が部屋を掃除した」

b 「花子が部屋の掃除をした」

「スル」と「VN」との間におけるヲ格の介入には、〔+意図性〕〔+持続性〕といった構文条件が必要である。次の自動詞的 VN の例を参照されたい。

(2) a 「\*赤ちゃんが誕生をした」

b 「花子は第 2 の誕生をした」

「誕生する」は経験者主語で結果状態を表わす非能格 VN である。動作の意図性がなく、時間的持続性も見られないため、「VN+ヲスル」構文は成立できない。しかし、「第 2 の」という修飾語が付けられると、「VN+ヲスル」構文が容認されるようになる。

本稿は、先行研究で明かされた意味素性を用いて、「VN」と「スル」の間におけるヲ格介入の容認度を検証し、「非能格・非対格 VN+ヲスル」の構文的意味的制約を考察するものである。その結果、「主語名詞句のコントロール性」・「アスペクト的時間性」・「語彙概念構造 (LCS)」という三つの制約を満たさない限り、「VN+ヲスル」構文の成立が認められないことが明らかになった。

キーワード：「主語名詞句のコントロール性」・「アスペクト的時間性」・「語彙概念構造 (LCS)」

# 「VN+ヲスル」構文の意味的制約をめぐって — 「非能格・非対格 VN<sup>1</sup>」を中心に—

李偉煌

静宜大学日本語文学系副教授

## 1. はじめに

日本語における「VNヲスル」構文の成立条件をめぐっては、次のような例文がよく知られている。

(1) a 「花子が部屋を掃除した」

b 「花子が部屋の掃除をした」

「掃除する」は他動詞的 VN であり、動作主による意図的な動作であるため、「する」と「VN」との間にヲ格介入の容認度が高い。しかし、同じ他動詞 VN でも、

(2) a 「警察が犯人を逮捕した」

b 「\*警察が犯人の逮捕をした」

「逮捕する」は意図性の高い他動詞 VN でありながら、「NP の VN+ヲスル」構文を成立させるには抵抗感が高くなり、ヲ格介入の容認度が低くなる。これは、「逮捕」に含まれているアスペクト的な時間の持続性の有無という VN の構文的意味制約と矛盾しているからである。

次の自動詞的 VN の例を参照されたい。

(3) a 「\*赤ちゃんが誕生をした」

b 「花子は第 2 の誕生をした」

「誕生する」は経験者主語で結果状態を表わす非能格 VN である。動作の意図性がなく、時間的持続性も見られないため、「VN+ヲスル」構文が成立できない。しかし、「第 2 の」という修飾語が付けられると、「NP の VN+ヲスル」構文が容認されるようになる。

---

<sup>1</sup>本稿では漢語動名詞を「VN」とし、自動詞的な VN を非能格 VN と非対格 VN に分けて考察する。

(4) a 「\*カビが発生をした」

b 「科学研究でカビの発生をした」

「発生する」は主語が無生物で結果状態を表わす非対格 VN である。意図性はもちろん、時間的持続性もまったくないため、「VN+ヲスル」構文が不自然とされる。しかし、「～でカビの」という修飾語が付けられると、「NP の VN+ヲスル」構文におけるヲ格介入の容認度が高くなる。

本稿は、先行研究で明らかになった構文的意味素性を用いて、「VN」と「する」の間におけるヲ格介入の容認度を検証し、「非能格・非対格 VN+ヲスル」構文の意味的制約を考察するものである。

## 2. 先行研究と本稿の位置づけ

### 2.1 田野村(1988)

田野村(1988)の研究は、「動作名詞」を、「動詞概念部」と称し、「スル」と「ヲ」の挿入可能について考察を行ったものである。特に修飾語「～ノ」がつけられた「動詞概念部」全体における意味内容の分析に焦点を絞り、この文型の成立をめぐるいくつかの制限を提示している。それらを簡単に整理しておく。

(5) 「動詞概念部」が、動作や行為の意味を表すものでなければならない。このため、次のような意味特徴が「動詞概念部」に含まれてはならない。

a : 意図性のない行為や動作は、「ヲ」の挿入が不自然になる。

「? 毒物の検出を する」「? 定期券の紛失を する」

b : 動作が始点または終点の意味を有しなければならない。そのため、瞬間的な動作では「ヲ」の挿入は認められない。

「? 受付の開始を する」「? 権利の放棄を する」

c : 意図的な動作でありながらも、それが心理的な事柄を表すものであれば、「ヲ」の挿入が難しくなる。

「? 優勝の期待を する」「? 学生時代の回想を する」

(6)「動詞概念部」自体に「～を行なう」といった意味を表している場合は、「ヲ」の挿入には、やや抵抗を感じる。

「?工事の断行を する」「?政策の実施を する」

「スル」における「ヲ」の挿入問題は、「～ノ」の修飾語を冠した「動詞概念部」の綿密な意味分析によって構文の制限は従来のより一段と明らかになった<sup>2</sup>。

しかし、この構文的意味制約は、「動作名詞」に含まれるものか、それとも「～ノ+動作名詞」における「動詞概念部」全体の意味制限なのか、などについては、区別されずに考察が行われてきた。このため、次のような例文を解説しようとするには、説明の付かない部分がよく見られる。

(7)「油断を する」 「遅刻を する」 「失敗を する」

「死の覚悟を する」 「転勤の希望を する」

「油断」や「遅刻」のような「VN」は、動作主が意図的に行なう行為ではないものの、「ヲ」の挿入が自然とされる。一方、「覚悟」や「希望」のような心理的な事柄を表す場合、「ヲ」の挿入が認められないものの、修飾語を伴った「死の覚悟」「転勤の希望」となると、不自然さを感じさせることなく、「ヲ」の挿入が自然になる。

このように、「ヲ」の挿入可否をめぐっては、「動詞概念部」を、「単なる動作名詞」と「～ノ+動作名詞」という二つの文型に分けて考えることによって、はじめてその構文制約を明らかにすることができる。

## 2.2 平尾(1990)

田野村の研究とちがって、平尾(1990)の研究では、まず、「動作名詞」を「VN」と称し、「VN」の語構成を分析し、その文法的な結合関係を検討した。そして、「VNヲスル」構文では、それが「VN」に含まれる意志性・主体性の強弱によるものとして位置づけ、「ヲ」の挿

---

<sup>2</sup>田野村忠温(1988)より要約。

入における構文制限についての考察を行った。氏のいう主体性有無の主張に従えば、次のような主体性のない「VN」は、「ヲ」の挿入が認められない。

- (8) 「\*開花を する」 「\*出水を する」  
「\*関係を する」 「\*意味を する」

主体性・意志性の有無や強弱からの観察は、従来の研究との違ったところが見られないものの、修飾語の付いた「NノVN」の場合、副詞成分との共起を通し、全体として、ある動作を行なう時間的幅を有しなければ、「ヲ」の挿入が認められにくいことを明らかにした。したがって、同じ「VN」でも、その意味内容を、動作進行のどの局面に捉えるかによって、特に「NノVNヲスル」構文になる場合、文としての自然さの違いが生じてくるのである。次の例を見られたい。

- (9) 「 コースを 選択する」  
「 コースの選択を する」  
「?このコースの選択を する」

「選択」に含まれている動作の時間的幅が「この」によって、限定され、「このコースの選択」が結果性のある「VN」として捉えられ、「ヲ」の挿入は不自然となる。また、「NノVN」の場合は、「VN」がほかの成分に影響され、全体を一語として捉えられるようになるという「一語化」の概念も提案している。

- (10) a. 「?私は M7.1 の地震の観測を した」  
b. 「 私が M 7.1 の地震の観測を した」  
c. 「 大学では M 7.1 の地震の観測を している」

ハ・ガにおける既知・未知の議論はともかく、この場合の(10)bにおける「M 7.1 の地震の観測」が旧情報となり、全体を一語として捉えることができる。そして(10)cの場合は、「チームを組んで、～をする」という一つのプロジェクトの意味が強くなったため、文として認められやすくなるのであろう<sup>3</sup>。

---

<sup>3</sup>平尾得子(1990)より要約。

平尾の研究は、「VN」と「スル」における「ヲ」の挿入問題を説明するには、有効なものであり、示唆されるところも多かったが、取り上げられた用例の少なさにやや残念に思われる。また、同じ「VN」でも、目的語のついた「NノVN」の修飾関係になると、その全体的な意味変化をどう見るか、といった更なる体系的な分析が待たれるものである。

### 2.3 影山(1993)

影山は、田野村(1988) 平尾(1990)の考察で明らかになった意図性の構文条件を発展させ、「VNヲスル」におけるヲ格標示の可能性は、自動詞的なVNを観察すると明らかになるとしている。

- (11) 「\*長男が誕生をした」      「\*友人が死亡をした」  
      「\*水が蒸発をした」      「\*株価が下落をする」

これらのVNは自然に生じるような事態を表わし、主語名詞句はその出来事ないし状態を意図的に操作することができない。一方、

- (12) 「食事をする」      「講演をする」  
      「結婚をする」      「徹夜をする」

など、同じく自動詞であっても、意図的な行為を表わすような場合にはヲ格標示が可能となる。しかし、意図的な行為であることは絶対的な条件ではないことを説明し、次のような例が挙げられている。

- (13) a 「突然、息子が家出をした」  
      b 「\*突然、息子が蒸発をした」  
(14) a 「その歌手は紅白歌合戦に出場をしないつもりだ」  
      b 「\*役者が舞台に登場をした」

「家出・出場」と似た意味のVN「蒸発・登場」が用いられるbは「VNヲスル」構文を形成できないのだが、bは意図的な行為を表わしていないと断言できるかどうか疑問になる。この問題について、影山は、「蒸発」に対しては「主語の意図的動作を表現するのではなく、主語が姿を消したことを第三者の立場から描写したもの」、「登場」に対しては「役者や選手が出てくる様子を観客の目から客観的

に述べる表現であるから、主語の意思とは直接に関係しない」と述べている。これは、つまり、「VNヲスル」が成立するには、意図性のほかに、主語の性質にも関係し、動作主だけに限定することは不適當であることを示している。次のような主語が経験者の例も挙げられている。

(15) 「父が胃の手術をした」

「子供が足に怪我をした」

「あの人はしょっちゅう病気をしている」

ここでの経験者が単なる受身的な存在ではなく、手術を受けるかどうかは主語の意思で選択可能であり、怪我や病気の場合も、自分の意思でそうならないようにコントロールすることは可能である。しかし、同じ経験者を含んでいても、ヲ格標示は受け入れにくい次の例もある。

(16) a 「\*シンフォニーホールでの演奏会を聴いて、私はすっかり感激をした」

b 「\*若者たちは『二十四の瞳』を読んで感動をした」

「感激」「感動」などは対象からの刺激によって生じる受動的な心理反応を表わすもので、そこには主語が意図的にコントロールする可能性はないからである<sup>4</sup>。

このようにVNが「を」を伴うかどうかは、「する」によってではなく、VNそのものの意味的性質によって決定される。要するに、意図的行為を表わす非能格VNはVN自体にヲ格を許すが、他方、意図性の事象を描写する非対格VNはその「非対格」の名の通り、VN自体にヲ格を許さないということになる。

影山の研究は自動詞的VNに焦点を絞って考察してきたことに評価をしたいが、自動詞VNを全面的な考察するに至らなかった。「非能格・非対格VNヲスル」構文における意味制約の考察が待たされる。

---

<sup>4</sup>影山太郎(1993)p. 282に基づいて、筆者がまとめた意味的制約である。

## 2.4 本稿の位置づけ

「VNヲスル」構文におけるの先行研究では、1. VNが意図的な動作  
2. 主語が動作主もしくは経験者 3. VNが一定の時間的持続が必要、と  
いう三つの文法的な制約をまとめることができよう。今までの研究  
は、自動詞VNと他動詞VNを区別せずに考察を行ってきたものが多  
く、その研究成果は必ずしも、非能格VNと非対格VNに適用できる  
とは限らず、特に自動詞VNでは先行研究で明らかになった構文条件  
だけでは通用しないところがある。たとえば、

(17) a 「\*赤ちゃんが誕生をする」

b 「?花子が第二の誕生をする」

(18) a 「\*水が蒸発をする」

b 「?水分が蒸発をする」

(17)(18)のaは自動詞VNであり、「する」との間に「ヲ」の介入  
が認められない。これに対して、(17)(18)のbにおけるヲ格介入の  
容認度が(17)(18)のaよりも高くなるのはなぜだろうか。これは、  
自動詞VNにおける「VNヲスル」構文の成立可否に他動詞VNと違っ  
た構文的な意味制約が含まれるのを示している。

本稿では、先行研究で明らかにいくつかの構文条件を引用しながら、  
日本語における「自動詞VN+ヲスル」構文の成立における構文  
意味制約を考察することを目的とする。

## 3. 考察対象と分析方法

### 3.1 非能格VNと非対格VN

従来、動詞は単純に他動詞と自動詞に二分されているが、近年、  
いくつかの文法理論において、自動詞は単一の部類ではなく、さら  
に非能格自動詞 (unergative verbs) と非対格自動詞 (unaccusative  
verbs) と呼ばれる2つの種類に区別できることが広く認められてい  
る。影山(1993)は非能格動詞と非対格動詞の区別に統語的と意味  
的な2つの側面があるとしている。意味的には、意図的に動作を行

う「動作主」(Agent)を主語に取るのが非能格動詞、意図を持たず受動的事象に係わる「対象」(Theme)を主語に取るのが非対格動詞と、大雑把に分類できる、としている。統語的には、非能格自動詞の動作主主語は「外項」(external argument)、そして、非対格自動詞の対象目的語は「内項」(internal argument)とされる。つまり、非能格動詞の主語は統語構造で普通の他動詞の主語と同じであるが、非対格動詞の主語は統語構造では他動詞の目的語に相当する(これは<非対格の仮説>と言われている)。これを項構造で示すと次のようになる。

a. 非能格自動詞：(Agent <\_\_\_\_\_>)

ex. 老夫婦が \_\_\_\_\_離婚する

食事する・帰宅する・安心する・喧嘩する・緊張する・感動する

b. 非対格自動詞：(\_\_\_\_\_ <Theme>)

ex. \_\_\_\_\_会長が 死亡する  
悪化する・蒸発する・発生する・崩壊する

本研究では、自動詞的な非能格動名詞を非能格 VN、そして自動詞的な非対格動名詞を非対格 VN と名づけて考察を進めていく。

### 3.2 考察の対象と用例の検索

#### 3.2.1 考察対象と自然度の判断

考察の対象は、相澤正夫(1993)『『日本語教育のための基本語彙調査』と複合サ変動詞』の中で挙げられている1080の複合サ変動詞の中から、「を格」を取らない自動詞 VN と見られる246語を抽出し、考察を行うことにする。また、「VNヲスル」構文におけるヲ格介入の自然度判断も、主に相澤正夫(1993)の研究によるところが多い。

#### 3.2.2 用例の検索方法

「VNヲスル」構文におけるヲ格の介入の適切性は人によって判断基準が違い、揺れのある表現であるが、今の時代では、このような表現がブログで多用されているのも事実である。まだ定着されず、

変化進行中の表現を考察していくには、データベースに収められている用例だけでは、しばしば限界に達したことがある。生きている表現を採取するには、ネットで公開された多数のブログやホームページから事例を引用するのがもっとも効率的であり、日本語の今をうまく捉えることもできるのである。こうした理由に基づいて、本稿では、グーグルを用い、ネットで公開されたブログやホームページから用例を検索し分析を行うことにした。

### 3.3 意味素性と語彙概念構造 (LCS)

#### 3.3.1 意味素性による分析

「VN ヲスル」構文に課せられている意味的な制約を考察していくには、まず、「VN する」構文と「VN ヲスル」構文の違いを確認しておかなければならない。

(19) a 「花子は部屋を掃除した」

b 「花子は部屋の掃除をした」

(a)の「する」は軽動詞の「する」であるが、(b)の「する」は他動詞の動的「する」である。軽動詞の「する」は、意味内容が空で、述語形成という文法的機能に特化した動詞である。そのため、前接する要素がVNである限りは、問題なくそのVNと結合する。この場合の「VN する」の項構造・意味・アスペクト的性質はVNの情報をそのまま引き継ぐ。一方で、動的「する」は、軽動詞「する」と対照的に、より具体的な意味内容をもつものであり、項構造はもちろん、アスペクト的性質も指定されていると考えられる。したがって、この「する」とVNの結合は、両者の語彙的な情報が合成されるかたちで構文的意味を成しているのであり、その整合の度合いが高いほど、「VN ヲスル」構文の容認度が高くなる。

「VN ヲスル」構文の構文的制約を考えるには、いままでの先行研究ではよく挙げられたのは、主語（ここでは主語名詞句と呼ぶ）の意図性の有無というものである。これは確かに「VN ヲスル」構文の成立に深く係わっている構文的意味制約であるが、必ずしも絶対基

準にはならないと考えられる。影山（1993）は、「VNヲスル」構文の成立には、主語名詞句が「所与の事態・動作をコントロールできるかどうか重要な要因となる」と述べている<sup>5</sup>。これは、「怪我をした」「病気をした」のような「VNヲスル」構文の主語は〈動作主〉ではなく〈経験者〉である。この場合の〈経験者〉は「単なる受身的な存在ではなく、示された事態に陥るかどうかを自分の意思によってある程度コントロールできる立場にあることに注意しなければならない。怪我や病気の場合は、自分の意思でその状態になることは普通できないものの、そうならないようにコントロールすることは可能である、と説明している<sup>6</sup>。本稿では、このような構文的制約を「主語名詞句の制約」と呼んで、「VNヲスル」構文の成立条件を考察していく。

しかし、「主語名詞句によるコントロール可能性」のみで、「VNヲスル」構文成立の可否が十分に説明できるわけではない。「出発すること」も「木を伐採すること」も、どちらも明らかに主語によるコントロール性が高いが、「伐採をする」は言えるが、「？出発をする」の表現には抵抗を感じる人も決して少なくない。これは、「VNヲスル」構文が成立するために、VNの意味素性には、一定の時間的持続性という意味素性が含まなければならないことを示している。また、「森林の伐採をする」は自然な表現であるが、「？一本の立ち木の伐採をする」の場合は、不自然な表現になるように、VNだけではなく、「NPのVN」になっても、動作の過程をもつ事態を表わすのでなければならないことを示している。ここでは、このようなアスペクト的な意味素性の制限を「アスペクト的制約」と位置づけて、考察を進めていく。そして、このようなVNには一定の時間的持続性が必要であることは、VNまたはNPのVNの語彙概念構造の変化に関連し、影響を与えることを明らかにする。

### 3.3.2 語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure)

---

<sup>5</sup>影山太郎(1993)p. 283より引用。

<sup>6</sup>影山太郎(1993)p. 283より引用。

語彙概念構造 (LCS) は、1970 年代の生成意味論に端を発し、その後、Jackendoff(1990) などにより展開されてきた意味理論である。語の意味には概念的意味と含蓄的意味があるが、語彙概念構造は、動詞の概念意味を明確に表示し、言語の意味的性質、そして統語構造と意味構造の関係を明確化しようとするものである。また、動詞の意味がばらばらに存在するのではなく、いくつかの意味のグループを構成していると考えられる場合、とりわけ、重要なのは、「状態 (state)」「活動 (activity)」「変化 (change)」といったアスペクトを軸として外界の出来事を認識し、動詞として言語化する際の式型 (スキーマ) なのである。Vendler からのいくつかの動詞分類を基にして、語彙概念構造では、次のような基本的な意味タイプをまとめることができる。

語彙概念構造の基本形：

a 状態動詞 (stative verbs) (アル型)

[state [ ]y BE AT-[ ]z ]

b 到達動詞 (achievement verbs) (ナル型)

[event BECOME [state [ ]y BE AT-[ ]z ] ]

c 活動動詞 (activity verbs) (スル型)

[event [ ]x ACT ON-[ ]y ]

d 達成動詞 (accomplishment verbs) (ナル型)

[event [ ]x ACT ON-[ ]y ]

CAUSE [event[BECOME[state [ ]y BE AT-[ ]z ] ] ]<sup>7</sup>

CAUSE, BECOME, BE, AT, ACT など、大文字の英単語で表したのは<使役>や<変化>といった意味の概念で、意味述語 (定項) と呼ぶ。これに対し、x や y の空欄の部分は変項 (variable) と呼び、具体的な文においては、項 (主語や目的語) がそれらの位置に対応する。新しい動詞ができる場合は、このスキーマに基づいて生成されるのが語彙概念構造の考え方の仮説である。

<sup>7</sup>影山・由本(1997) p6 に基づいてまとめたものである。

語彙概念構造の基本形を、よく使われている自動詞・他動詞の分類に当てはめると、次のようになる。

自動詞：

- ・非対格自動詞＝語彙概念構造の a 状態動詞、b 到達動詞
- ・非能格自動詞＝語彙概念構造の c 活動動詞（“ACT” のみの場合）

他動詞：

- ・状態変化他動詞＝語彙概念構造の d 達成動詞
- ・働きかけ他動詞＝語彙概念構造の c 活動動詞（“ACT ON” のみの場合）

非対格自動詞は人間の意思的作用が関わらない自然発生的ないし自発的な出来事を、非能格自動詞は主として生物の意思的活動を表す。また、統語構造の違いにおいては、非能格自動詞の主語は普通の他動詞の主語と同じで〔外項〕にあるが、非対格自動詞の主語は他動詞の目的語〔内項〕に相当すると考えればよからう。

台湾日語教育學報第26号

#### 4. 非能格 VN+ヲスル

##### 4.1 ヲ格介入が自然な VN

###### 4.1.1 (A1 グループ) 〈動作主〉が

食事・授業・独立・活動・運動・行動・動作・行為・作業・洗面・遠足・体操・水泳・労働・出張・拍手・休憩・生活・起床・徹夜・裁縫・炊事・駐車・造船・演習・失業・努力・禁煙・演技・出演・主演・乱暴・投票・署名・調印・留守・滞在・不在・外出・上京・行列・講演・学問・発言・演説・座談・会議・読書・迷惑・謙遜・恐縮・貧乏・贅沢・苦勞・油断・出世・活躍・優勝・心中・落第・成長・病氣・下痢・出血・自殺・戦死

(20) 仕事が忙しいのであれば、せめて食事をしているときくらいは、のんびり時間を過ごしたらどうだろう。

- (21) 昨日は、私事で留守をしてしまい大変ご迷惑をおかけいたしました。
- (22) いくらすばらしい話術、テクニックで講演をしても、ゴールにズレがあると成功とはいえません。
- (23) 隣人に凄く迷惑をしています。少し長くなりますがよろしくお願いします
- (24) 重い病気をしてしまったり、障害が残るようなケガなどをした場合には、奨学金の一部、または全部を免除する制度があります。

「食事」「留守」「講演」のような非能格 VN は、主語名詞句が〈動作主〉であり、意図的な物理動作であるため、ヲ格介入の容認度が非常に高い。これに対して、「病気」「迷惑」などのような VN は、「食事」などに比べ、意図性がやや低くなるのだが、主語名詞句による、そうならないようにコントロールする可能性があるため、ヲ格の介入も問題なく認められる〔+コントロール性〕。また、このグループの VN には、一定した動作や作用の時間的持続性があるものの、開始と終了といったアスペクト的な意味素性が指定されていない〔+アスペクト的持続性〕。アスペクトを軸とした語彙概念構造 (LCS) の基本型 (スキーマ) から見れば、活動動詞 (activity verbs) の概念構造に属されているので、「する」と VN の結合における語彙的な情報の整合度が高く、ヲ格介入が問題なく行われ、「VNヲスル」構文の成立可否の容認度がもっとも高い。

A1 グループ VN の意味素性：

主語名詞句制約：〔動作主〕〔+コントロール性〕

アスペクト制約：〔+アスペクト的持続性〕

語彙概念構造の意味タイプ：〔活動動詞〕

#### 4.1.2 (A2 グループ) 〈動作主〉が〈場所〉に

帰宅・移住・到着・到達・着陸・上陸・進出・登校・来日・  
 帰国・帰京・入学・入浴・入国・入院・入社・乗車・遅刻・  
 下宿・着席・就職・留学・就任・応募・勤務・通勤・出勤・

進学・通学・出席・参加・加入・位置・登山・移民・

(25) クリーンな職場に勤めている旦那は結婚後、残業が少ないためにずっと 19 時には自宅に帰宅をしていたのですが、

…

(26) 直接大学に入学をしなくても大学の下部組織にあたる語学学校に入学がな大学を選択していく方法をとることにしたのである。

(27) 日本で留学し、日本企業に就職をして、ミャンマーで支社長として頑張るミャンマー人女性に伺いました。

(28) 授業に出席をしていたのに、「欠席」になっていました。どうしたらよいですか？

「帰宅」「出席」「入学」のような非能格 VN は、A1 グループと同様に、主語名詞句が〈動作主〉でありながら、意図的な移動動作であるため、場所を表わす「ニ格」を取るのが普通である。主語名詞句による動作のコントロール可能性が高く、「VN ヲスル」構文になる場合、ヲ格介入は A1 グループと同じように抵抗なく行われ、その容認度も非常に高く見られる〔+コントロール性〕。また、このグループも、一定した移動動作の時間的持続性があるものの、開始と終了といったアスペク的な意味素性が指定されていない〔+アスペク的な持続性〕。アスペクトを軸とした語彙概念構造 (LCS) の基本型から見れば、活動動詞 (activity verbs) の概念構造に属されているので、「する」と VN の結合における語彙的な情報の整合度が高く、ヲ格介入が問題なく行われ、「VN ヲスル」構文の成立可否の容認度がもっとも高い。

A2 グループ VN の意味素性：

主語名詞句制約：〔動作主〕〔+コントロール性〕

アスペクト制約：〔+アスペク的な持続性〕

語彙概念構造：〔活動動詞〕

#### 4.1.3 (A3 グループ) 〈経験者〉が〈相手〉に

安心・興奮・憤慨・同情・苦心・苦勞・失望・孝行・合格・

入賞・当選・所属・賛成・抗議・反対・同意・妥協・協力・  
反撃・違反・衝突・干渉・接触・反応・返事・電話・電報・  
解答・奉仕・

(29) 大隅学士は、幸いに誰に見咎められもしない様子に安心を  
して、宏大なる邸内の探険にとりかかった。

(30) 安保法案に賛成をしてる人たちは、戦争する気満々です  
か？

(31) 自分が大学に合格をして、志望校で楽しいキャンパスライ  
フを送っている姿を想像してみましょう。

(32) アレック・ボールドウィンが 27 日（現地時間）、執拗に付  
きまとうパパラッチに反撃をしていたことが分かった。

「安心」「賛成」「合格」のような非能格 VN は、A1・A2 グループ  
と違って、主語名詞句が〈動作主〉ではなく、〈経験者〉である。相手の  
「ニ格」を取る心理的な作用を表わすものが多く、相手に何らか  
の心理的な影響を与えるのが特徴である。物理的な動作ではないた  
め、動作の意図性が A1・A2 グループに比べ、やや低く感じられるも  
の、主語名詞句による心理作用のコントロール性が決して低くない。  
「VNヲスル」構文になる場合、ヲ格介入は A1 A2 グループほど  
の容認度でなくても、問題なく容認されている〔+コントロール性〕。  
また、このグループは、A1・A2 グループほどの時間的持続性がない  
ものの、瞬間的なアスペクト的な意味素性も見られない〔+アスペ  
クト的持続性〕。アスペクトを軸とした語彙概念構造（LCS）の基本  
型からは、同じく活動動詞（activity verbs）の概念構造に分類され  
ているので、「する」と VN の結合における語彙的な情報の整合度が  
高く、ヲ格介入が問題なく行われ、「VNヲスル」構文の成立可否の  
容認度も高い。

A3 グループ VN の意味素性：

主語名詞句制約：〔経験者〕〔+コントロール性〕

アスペクト制約：〔+アスペクト的持続性〕

語彙概念構造の意味タイプ：〔活動動詞〕（心理的）

#### 4.1.4 (A4 グループ) 〈動作主〉が〈相手〉と

会談・会話・雑談・対談・面会・会見・結婚・恋愛・乾杯・  
喧嘩・婚約・交際・握手・競争・競技・戦争・戦闘・勝負・  
外交・共存・対立・通信・同様・

(33) 収入が少ない男性と結婚をしても、女性は共働きをしなければならず、それどころか出産すらも諦めなければならないためです。

(34) グlobal競争のなかで海外の金融機関と競争をしていこうと思えば、同じだけの生産性をあげなければならない。

(35) 安倍総理は昨年オバマ大統領と会談をして、「聖域」があることを確認したから TPP 交渉に参加したのではなかったのか。

(36) 昔は、山や森、林に住んでいたカラスと共存をしていた私たちですが、現代では私たち人間の現在の住処との共生をはかっていかなければならないこととなりました

「結婚」「競争」のような非能格 VN は、A3 グループと違って、主語名詞句が〈経験者〉ではなく、〈動作主〉である。相手の「ト格」を取る心理的な作用を表わすものが多く、相手と積極的に何らかの心理的・物理的な共同動作や作用を行うのが特徴である。物理的な動作の VN であるため、意図性は A1 グループと同じぐらいのものである。これに対して、「会談」「共存」などは、意図性が「結婚」「競争」より低いが、主語名詞句による動作のコントロール性は決して低くないと見られる。「VN ヲスル」構文になる場合、ヲ格介入は A1 A2 グループほどの容認度となり、問題なく行われている〔+コントロール性〕。また、このグループの VN には、一定した動作や作用の時間的持続性があるものの、開始と終了といったアスペクト的な意味素性が指定されていない〔+アスペクト的持続性〕。アスペクトを軸とした語彙概念構造 (LCS) の基本型から見れば、活動動詞 (activity verbs) の概念構造に属される。「する」と VN の結合における語彙的な情報の整合度が高く、ヲ格介入が問題なく行われ、「VN ヲスル」

構文の成立可否の容認度が高い。

A4 グループ VN の意味素性：

主語名詞句制約：〔動作主〕〔+コントロール性〕

アスペクト制約：〔+アスペクト的持続性〕

語彙概念構造の意味タイプ：〔活動動詞〕

## 4.2 ヲ格介入がやや不自然な VN

### 4.2.1 (B1 グループ) 〈経験者〉が

緊張・疲労・退屈・睡眠・微笑・沈黙・生存・出生・誕生・  
発育・死亡・病死・休息・結論・

(37) 明日は重要な日なのに緊張して眠れない！そんな経験をした人は多いのではないのでしょうか。

(38) 筋肉は、神経から送られてくる刺激によって収縮するが、神経に比べて疲労しやすい。

(39) 成長ホルモンが一番分泌する時間は、実は睡眠している時間なのです。

(40) 浮気する理由、浮気の原因は多くの場合、”倦怠”だという。要するに飽きてしまったのだ。退屈してしまっただのだ。

(41) お笑いコンビ・タカアンドトシのトシに第3子となる女兒が誕生していたことが28日、わかった。

(42) 数か月前に夫が死亡し、郵便局で簡易保険の死亡保険金の受取りを請求したところ、郵便局から「死亡診断書の写し」を持ってくるように言われました。

「緊張」「疲労」「睡眠」のような非能格 VN は、主語名詞句が〈経験者〉であり、動作・作用の意図性がまったく感じられない一群の心理的・感覚的動詞である。相手の「ト格」や「ニ格」を取る心理的な作用を表わす VN が多い A グループの心理的・物理的な共同動作や作用を表わす VN と違って、動作による対象への影響がなく、〈経験者〉自身の感覚を表わす VN が大半である。また、「誕生」「死亡」などは、主語名詞句の〈経験者〉がコントロールできるような動作や

作用だけではなく、しかも一回性の開始や終了のアスペク的な意味素性が含まれて、一定した動作や作用の時間的持続性を持たない瞬間的 VN が多い [-アスペク的な持続性]。「VN ヲスル」構文になる場合、ほとんどの場合、ヲ格の挿入が認められないのである [-コントロール性]。アスペクトを軸とした語彙概念構造 (LCS) の基本型から見ると、状態動詞 (stative verbs) の概念構造に属される。「する」と VN の結合における語彙的な情報の整合度が低く、「VN ヲスル」構文の成立の容認度がたいへん低い。

B1 グループ VN の意味素性：

主語名詞句制約：[経験者] [-コントロール性]

アスペクト制約：[-アスペク的な持続性]

語彙概念構造の意味タイプ：[状態動詞]

#### 4.2.2 (B2 グループ) <経験者><ものごと>が<相手><場所>に・<相手>>と

感動・感心・感激・出場・同感・絶望・執着・一言・影響・  
関係・関連・該当・付属・接近・命中・着手・相違・類似・  
並行・一致・矛盾・平行・同盟・抵抗・対抗・

(43) 生後 10 ヶ月の赤ちゃん、ママの素晴らしい歌声に感動して泣いちゃった！

(44) 小さい時の些細な出来事がいろんなことに影響しているとは思いませんでした。

(45) ストレスがニキビの発生に関係している！ ニキビができて、なかなか治らないと悩みを持っている人も多いと思います。

(46) 野党各党と一致して臨時国会の召集を要求。

(47) 聖書は科学の教科書ではありませんが、科学的な事柄に関する記述は正確です。聖書が科学と矛盾していないことを示す例を幾つか考えてみましょう。

このグループの非能格 VN は、二格またはト格を取るのだが、A3. A4 と違って相手に何らかの影響も与えない心理的な作用が大半を占め

ている。「感動」「影響」のような VN は、主語名詞句が〈経験者〉であり、相手に心理的な影響を与えることがあったとしても、A3.A4 グループの VN に比べ、意図性やコントロール性がまったく見られない一群の心理的・感覚的動詞である〔-コントロール性〕。また、「一致」「矛盾」なども、主語名詞句と相手との心理的な相互作用であるが、互いの影響がみられず、主語による対象へのコントロールも低い。「感動」「一致」のような VN は、B1 グループと同じように、一回性の開始や終了のアスペクト的な意味素性が含まれて、一定した動作や作用の時間的持続性を持たない瞬間的 VN である〔-アスペクト的持続性〕。「VN ヲスル」構文になる場合、B1 グループと同様にヲ格介入が認められないのである〔-コントロール性〕。また、アスペクトを軸とした語彙概念構造 (LCS) の基本型から見ると、状態動詞 (stative verbs) の概念構造に属される。「する」と VN の結合における語彙的な情報の整合度が低く、「VN ヲスル」構文の成立可否の容認度が決して高くない。

B2 グループ VN の意味素性：

主語名詞句制約：〔経験者〕〔-コントロール性〕

アスペクト制約：〔-アスペクト的持続性〕

語彙概念構造の意味タイプ：〔状態動詞〕（心理作用）

#### 4.3 「NP の」による容認度の変化

「緊張」「誕生」や「絶望」「一致」などのような B グループの VN は、「VN ヲスル」構文の成立にやや抵抗感があるが、次のような「NP の」という修飾語がつけられた場合は、「NP の VN」の構文的意味が「する」の文法的制約と共起しやすくなり、ヲ格介入が問題なく認められるようになる。次の例を参照されたい。

(48) なぜ「極度の緊張」をしてしまうのか？小雀の不安. 極度の緊張に覆われて、思ったような行動がとれない。

(49) 出産時に普通よりも過多の疲労をしてると思うので、母ハムには栄養のあるものと休養が必要です。

- (50) スティーブ・ジョブズ、エジソン、ナポレオンは 3~4 時間の睡眠をしていた ことでも有名ですよ。
- (51) 「第二の誕生」をしなければ、虚しく人生を送ってしまうのだ。この「第二の誕生」が、天命に目覚めること…。
- (52) その後も鳥取中は 1933 年に 2 度目の出場をしているが、夏の華々しい成績と比較すると物足りない。
- (53) 一人一人が出すエネルギーは小さくても、そのエネルギーの塊は、この宇宙に、沢山の影響をしています。
- (54) …実際は、死にたいくらいの絶望をしていたはずなのに、曲からは具体的には現れません。部分部分です。
- (55) 当社は様々な機会を通じて、船員と陸上社員が信頼しあえる雰囲気を作り、本船と 会社が認識の一致をし、安全経済運航が確実になるよう、努力しております。

「極度の緊張」は、単なる「緊張」の感覚だけではなく、程度または時間的な幅のある変化した状態となっている。「第二の誕生」「2 度目の出場」ももう一度生まれ変わろうという変化状態や出来事としての構文的な意味が強くなる。「認識の一致」もそうだが、B1. B2 のような VN は「NP の」という修飾語がつけられることによって、もとの VN に含まれた構文的な意味制約が緩み、「NP の VN」全体がひとつの状態変化動詞の「できごと」としてとらえることができれば、ヲ格介入の可能性が高くなる。この場合、主語名詞句が元の〈経験者〉から〈動作主〉に変わり、主語によるコントロール性も現れ、アスペクトも瞬間的から持続的になり、語彙概念構造も VN の〔状態動詞〕から状態変化可能の〔達成動詞〕に変わることになる。

「NP の VN」による意味素性の変化

主語名詞句制約：〔経験者〕 → 〔擬似動作主〕〔+コントロール性〕

アスペクト制約：〔-持続性〕 → 〔+持続性〕

語彙概念構造の意味タイプ：〔状態動詞〕 → 状態変化の〔達成動詞〕

## 5. 非対格 VN+ヲスル

### 5.1 ヲ格介入がやや自然な非対格 VN

(C1 グループ) <ものごと>が

悪化・変化・酸化・回転・故障・機能・作用・停車・交叉・  
実現・混乱・混雑・上昇・墜落・防火・爆発・増加・増大・  
減少・発展・発達・破産・蒸発・正解・妥結・噴火・反乱・

(56) 痛みがある時は、体が変化をしている時、そんな時は、楽しくないし面倒かもしれないけれど、心配せずにゆっくりと練習を。

(57) パソコンが故障をしてしまうと、インターネットも使えなくなってしまう。そんな場合は、どこでデータ復旧が出来るのかを調べようにも調べられないですよ。

(58) 砲弾を飛ばすための炸薬（装薬）が爆発をしても、中には火ははいりませんので大丈夫です。

(59) また、債権者は会社が破産をしてくれれば税務上、債権を損金計上できるため、債権者の方としても会社も破産を申し立ててくれることを望んでいるのが通常です。

(60) 人間の肌からは常に水分が蒸発をしています。クーラーなど大気中の水分が不足している環境下では、ますますこの蒸発のスピードが高まります。

非対格 VN は、主語名詞句は<動作主>や<経験者>ではなく、<ものごと>のような無生物がほとんどであるため、「VN ヲスル」構文におけるヲ格の介入は普通認められないのである。しかし、「体が変化をする」「装薬が爆発をする」「会社が破産をする」「水分が蒸発をする」のように、C1 グループは、ヲ格の介入が問題なく行われ、容認度も決して低くない一連の非対格 VN が存在しているのも事実である。このような VN は、当然のように主語名詞句には<動作主>が表れることないため、VN が意図的な動作や作用を表わすことができない。しかし、よく考えてみると、「変化」「爆発」が必ずしも一回性の状態動

詞ではなく、「破産」「蒸発」には、Aグループのように、そのVNには、一定した動作や作用の時間的持続性、または開始と終了といったアスペク的な意味素性も指定されていない。これはアスペク的な制約から分析すれば〔+アスペク的な持続性〕という意味素性をもっていると言える。そして、アスペクを軸とした語彙概念構造(LCS)の基本型から見ても、単純な〔状態動詞(stative verbs)〕だけではなく、VNが状態変化の〔達成動詞(accomplishment verbs)〕という概念構造も含まれている。〔達成動詞〕の意味概念に属されているため、「する」とVNの結合における語彙的な情報の整合度が高く、「VNヲスル」構文の成立可否の容認度も高くなるのである。

C1グループVNの意味素性：

主語名詞句制約：〔ものごと〕〔-コントロール性〕

アスペク制約：〔+アスペク的な持続性〕

語彙概念構造の意味タイプ：〔達成動詞〕

## 5.2 ヲ格介入が非常に不自然な非対格VN

(C2グループ) <ものごと>が

発生・登場・成立・原因・存在・分布・滅亡・調和・安定・  
 停電・連続・振動・急行・伝染・前進・低下・沈没・崩壊・  
 繁殖・進歩・向上・終始・前後・傾斜・不足・紅葉・

(61) …貸金業者にお金の借り入れをしている人が必ずしも過払い金が発生しているとは限りません。

(62) 周囲の建物が崩壊している中、地震に耐えたのには驚きました

(63) 「焼肉のたれなのにいちご味」でお馴染みのこども焼肉のたれに、メロン味が登場してしまったようなので、買って食べてみました。

(64) …農地を一時借入して規模を拡大し、経営が安定してから農地代金を支払うことができます。

C1グループのVNと同じように、C2の非対格VNも主語名詞句がく

ものごと>のような無生物であり、「VNヲスル」構文におけるヲ格の介入はやや抵抗感があり、不自然と感じるものがほとんどである。これは、「\*発生をする」「\*崩壊をする」「\*登場をする」「\*安定をする」のように、C1グループと違って、VNは意図的な動作や作用を表わすことができない。「発生」「崩壊」などは、C1のVNに含まれている一定した動作や作用の時間的持続性、または開始と終了といったアスペクト的な意味素性も含まれていない。そして、VNが瞬間的な動作や作用を表わしているため、アスペクト的な制約から考えれば〔-アスペクト的持続性〕という意味素性をもっていると言える。また、アスペクトを軸とした語彙概念構造(LCS)の基本型から見ても、状態変化の〔達成動詞(accomplishment verbs)〕のような概念構造意味がなく、単なる〔状態動詞(stative verbs)〕という概念構造しか持っていない。〔状態動詞〕の意味概念に属されているため、「する」とVNの結合における語彙的な情報の整合度が低く、「VNヲスル」構文の成立可否の容認度も低くなるのである。

C2グループ VNの意味素性：

主語名詞句制約：〔ものごと〕〔-コントロール性〕

アスペクト制約：〔-アスペクト的持続性〕

語彙概念構造の意味タイプ：〔状態動詞〕

### 5.3 「NPの」による容認度の変化

「発生」「崩壊」「登場」「安定」などのようなC2グループのVNは、「VNヲスル」構文成立の容認度が低いが、「NPの」という修飾語がつけられた場合は、B2グループのように、「NPのVN」の構文的意味の変化により、「する」の文法的制約と共起しやすくなり、ヲ格介入が問題なく認められるような現象が見られる。次の例を参照されたい。

- (65) 「エアサイクルの家」では、動く空気で湿気を拡散させ壁内結露を防ぎ、カビやダニの発生をしにくくし、アレルギーに弱いお子様も安心して暮らせます。

(66) 何故、世界は戦後秩序の崩壊をし始めたのか? 以前は、誰が得をして誰が損をするのか、という問題提起で答えが見つかりましたが…

(67) 大堀彩さん 2015年3月に高校を卒業をして実業団チームに入りました、そんな大堀彩さんがミライモンスターに3度目の登場をします。

(68) また曲がっていたのですから、そのまま成長してしまうと倒れてしまい大きな木には成長しないため、まずは根っ子の安定をしてから徐々に成長をしてゆくのです。

「カビやダニの発生」や「戦後秩序の崩壊」などは、単なる「発生」「崩壊」の結果状態だけではなく、「NPのVN」全体が時間的な幅を有するひとつの出来事としてとらえるようになる。「3度目の登場」もB2グループの「2度目の出場」と同じように、もう一度出来事として実行し、しかもそれを達成させるようにがんばろうという変化状態や出来事としての構文的な意味が強くなる。C2のようなVNは「NPの」という修飾語がつけられることによって、もとのVNに含まれた構文的な意味制約が緩み、「NPのVN」全体がひとつの状態変化動詞の「できごと」としてとらえ、達成させる可能性があれば、ヲ格介入の可能性が高くなる。この場合、元の〈ものごと〉に代わり、主語名詞句が〈擬似動作主〉によるコントロール性も現れてくる。VN全体のアスペクト性も瞬間的から持続的になり、語彙概念構造もVNの〔状態動詞〕から状態変化可能の〔達成動詞〕に変わることになる。

「NPのVN」による意味素性の変化

主語名詞句制約：〔ものごと〕 → 〔擬似動作主〕〔+コントロール性〕

アスペクト制約：〔-持続性〕 → 〔+持続性〕

語彙概念構造の意味タイプ：〔状態動詞〕 → 状態変化の〔達成動詞〕

## 6. 「非能格・非対格 VN+ヲスル」構文の意味的制約

### 6.1 「VN+ヲスル」構文の場合

「非能格・非対格 VN+ヲスル」の構文的意味制約をまとめると、次のようなものとなる。

表 1

容認度	非能格VN	(主語名詞句)(コントロール可能性)	アスペクト的時間の持続性	LCSの意味タイプ
高	A1「講演」「病気」	(動作主)・(+)	(+)	(活動動詞)(物理動作)
高	A2「帰宅」「出席」「入学」	(動作主)・(+)	(+)	(活動動詞)(移動動作)
高	A3「安心」「賛成」「合格」	(経験者)・(+)	(+)	(活動動詞)(心理作用)
高	A4「結婚」「競争」「会談」「共存」	(動作主)・(+)	(+)	(活動動詞)(相互動作)
低	B1「緊張」「疲労」「誕生」「死亡」	(経験者)・(-)	(-)	(状態動詞)(心理・感覚的作用)
低	B2「感動」「影響」「一致」「矛盾」	(経験者)・(-)	(-)	(状態動詞)(心理作用)
	非対格VN			
高	C1「変化」「爆発」「破産」「蒸発」	(ものごと)・(-)	(+)	(達成動詞)(状態変化)
低	C2「発生」「崩壊」「安定」「低下」	(ものごと)・(-)	(-)	(状態動詞)(結果状態)

非能格 VN は A1 から A4 まで、〔+主語名詞のコントロール可能性〕〔+アスペクト的時間の持続性〕〔+語彙概念構造(活動動詞)〕の三つの構文条件を満たしているため、ヲ格の介入が問題なく認められる。これに対して、B1 から B2 までの非能格 VN は、〔主語名詞のコントロール可能性〕〔アスペクト的時間の持続性〕〔語彙概念構造(状態動詞)〕の三つの構文条件のいずれもマイナスになっているため、ヲ格の容認度が低くなり、不自然な場合が多い。

非対格 VN では、C1 は〔主語名詞のコントロール可能性〕がないものの、〔アスペクト的時間の持続性〕があり、しかも〔語彙概念構造(達成動詞)〕も含まれているため、ヲ格の介入が問題なく認められる。一方の C2 の VN の場合は、B1. B2 の VN と同じような構文的意味制約を有しているため、ヲ格の容認度が低いのである。

### 6.2 「NP の VN+ヲスル」構文の場合

表 2

	NPの非能格VN	(主語名詞句)・(コントロール可能性)	アスペクト的時間の持続性	LCSの意味タイプ
グループ	B1「極度の緊張」「第二の誕生」	(経験者)→(擬似動作主)・(+)	(-) → (+)	(状態動詞)→状態変化の(達成動詞)
グループ	B2「2度目の出場」「認識の一致」	(経験者)→(擬似動作主)(+)	(-) → (+)	(状態動詞)→状態変化の(達成動詞)
	ヲ格介入の容認度の変化	低 → 高	低 → 高	低 → 高
	NPの非対格VN	(主語名詞句)・(コントロール可能性)	アスペクト的時間の持続性	LCSの意味タイプ
グループ	C2「カビやダニの発生」「戦後秩序の崩壊」	(ものごと)→(擬似動作主)(+)	(-) → (+)	(状態動詞)→状態変化の(達成動詞)
	ヲ格介入の容認度の変化	低 → 高	低 → 高	低 → 高

B1. B2. C2 の VN は、「VN ヲスル」構文では、ヲ格介入の容認度が低い、「NP の」という修飾語がつけられた場合は、「NP の VN」全体には [+擬似動作主のコントロール可能性] [+アスペクト的時間の持続性] [+語彙概念構造 (達成動詞)] というような構文的意味変化が起こり、「する」の持っている文法的制約と共起しやすくなり、ヲ格介入の容認度が一段と上がる現象が見られる。

## 7. まとめと今後の課題

本稿の考察を通じて、「非能格・非対格 VN+ヲスル」の構文が成立するためには、[主体のコントロール性の高低] [アスペクト的時間の持続性の有無] そして、[語彙概念構造 (活動動詞・達成動詞)] のような意味素性が必要であることを明らかにしたが、非能格・非対格 VN には、「誕生する」などのような非能格と非対格の両方とも取れる VN が数多く存在しているのも事実である。たとえば、「花子は第二の誕生をする」が言えるものの、「\*新しい世界の誕生をする」となると、非文になるのはなぜか、といったことは、今後の課題としておきたい。

### < 付記 >

本稿は、2015 年 11 月 28 日に、台湾日語教育学会の主催した 2015 年度「台湾日語教育研究」国際シンポジウムで発表した内容を加筆

修正したものである。

## 用例出典

グーグル検索エンジン：<https://www.google.co.jp/>

## 参考文献

- 相澤正夫(1993)「『日本語教育のための基本語彙調査』と複合サ変動詞」国立国語研究所報告 105『研究報告集 14』(1993)
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 田野村忠温(1988)「『部屋を掃除する』と『部屋の掃除をする』」『日本語学』7-11 明治書院
- 平尾得子(1990)「サ変動詞をめぐって」『待兼山論叢』24 大阪大学
- 古澤純(2014)「「\*非対格動名詞+ヲスル」構文の分析—構文の型と漢語名詞の意味の関係に着目して—」日本語文法学会第15回大会研究発表論文
- 李偉煌(1995)「「NのVNをする」構文をめぐって」『日本文化研究』第6号(筑波大学大学院博士課程 日本文化研究学際カリキュラム紀要)